小田実全集〔小説　第31巻〕

大阪シンフォニー

目　次

第一楽章　原野の落日
荘重に、また、猥雑に……7

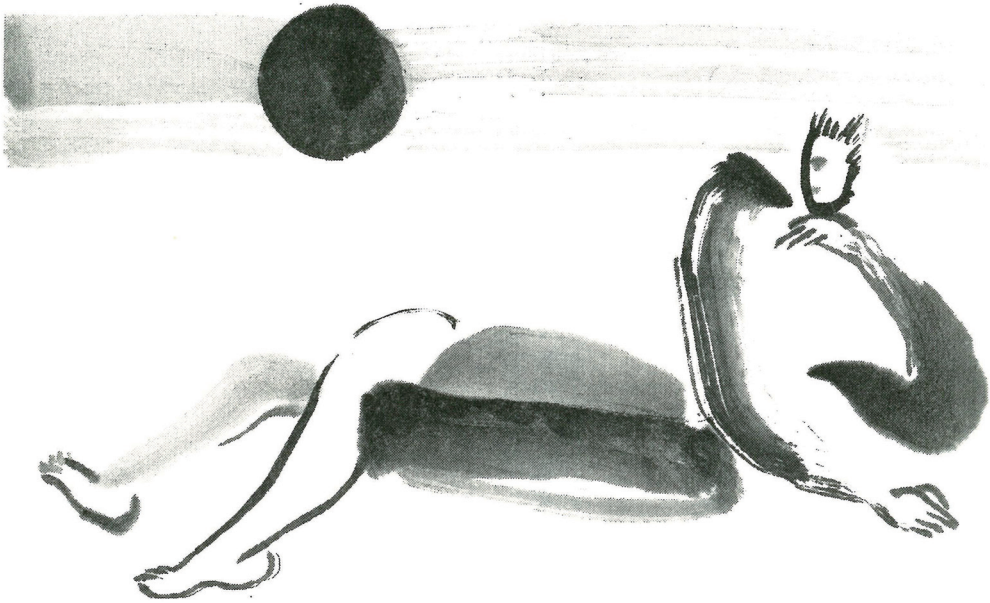
第二楽章　月光月影
華麗に、また、強靱に……49

第三楽章　おれとおまえの闇市
きわめて現実的に、また、幻想的に……93

第四楽章　ぬばたまの闇のなかのケモノ道
ケモノのごとくすばやく、また、重厚に……133

第五楽章　すべて世はダイジョウビ
にぎやかに、また、さびしく……165

第六楽章　あの世とこの世
深遠に、また、軽薄に……209
第七楽章　白昼堂々
剛胆に、また、細心に……259
第八楽章　原野の祝宴
美味、ケンランに……301
第九楽章　風の音のたわむれ
あくまで軽快に……343
あとがき……406



大阪シンフォニー

扉画　玄順恵（ヒョン スンヒェ）
装丁　北本裕章

第一楽章　原野の落日

荘重に、また、猥雑に

一

あのころは、朝、太陽はまっすぐに東方の山脈から昇り、夕刻、まっすぐに西方の海に落ちて行った。

あのころ、というのは、いくさはすんでいたが、大阪の大半がまだ焼野原だったころのことだ。大阪の東方につらなって見えるのは生駒山脈だから、朝、そこから太陽が昇るのは当然のことだが、西方、海への落日が見えたのは、市の中心部がただの赤茶けた瓦礫の面積に化していたからである。私はあのころ夕暮になるとよくわが家からかなりな距離を歩いてイクダマ神社のお宮は焼けてそこだけ焼け残った粗末な木造の展望台に上ったものだが、それはそこからそのあたりは大昔は海だったといういわれにふさわしく大阪の中心部の焼跡が見わたすかぎりひろがっているのが見えたからだけではなかった。そのところどころに空襲でなかに火が入って今はガラン洞になった建物が間抜けなかっこうでたつだけの、ただの赤茶けた瓦礫の面積のむこうにまぎれもなくキラリと光って海が見え、さらには海にむかって真赤な太陽が落下する壮大な落日の光景が眺められたからだ。

もちろん、私がこう言うと、「壮大」というようなことばはそれこそ壮大すぎて、スモッグやら二酸化炭素やらに大気が充満した大阪の落日には誇大すぎるとうるさいことを言い出す人がいるにちがいない。しかし、あのころ私がイクダマ神社の展望台から見た落日はまぎれもなく満州の原野さながらの壮大な落日だった。

ここでまず言っておきたいのは、一望赤茶けた瓦礫の面積と化した大阪の中心部はまさに原野であったことだ。ずっと以前、私がまだ小学生だったころに、私は親類から、満州の開拓民の子供の生

活を描いた絵本をもらっていた。そこに原野の落日の光景が出て来たのだが、私がイクダマ神社の展望台でまざまざと思い出していたのはその場面だ。まず満州の原野に落ちるのは真赤に燃え上る太陽だが、あのころの大阪は工場もなければ、車もろくに走っていない大阪だったから、空はあくまで澄みわたって、落日の太陽が燃え上る真紅の円球となって落下して行くのに適していた。そして、下界はただの焼跡、赤茶けた瓦礫の堆積。奇妙なことにいくさのあいだは生えていなかったが、そう記憶するが、いくさが日本が徹底して負けて終るとともにいつのまにかところによっては大人の背丈よりも高い雑草に一面に覆われた文字通りの原野になった。ペンペン草か、それともその一種だったにちがいないが、これが始末に負えなかったのは、引っこ抜こうとしてもこちらの手が切れてしまうぐらい茎も強靱なら根も頑丈にできていたことだ。

さて、このただの赤茶けた瓦礫の面積でなかったなら、ペンペン草の草原である原野に燃え上る真紅の円球が落下して行くのだ。それが原野の落日でなくて何んであろう。はじめは動いているのか動いていないのか判らぬぐらいの緩慢な動きを示していた太陽が下降の動きを急速に示し始めると同時に真赤に燃え上り始めて、あとはまさに一寫千里、赤いクレヨンでぐいぐいと一直線をタテに引くようにしてわが大阪原野のはての海めがけて落ちて行った。そのあとに来るのは西方の空の華麗なる燃え上りである。あれはまさに絵本に出て来た満州の原野の夕空の燃え上がりさながらであった。絵本には粗末な綿入れを着た開拓民の稚い兄妹が頬を落日の照り返しで真赤に染めながら原野の夕空の燃え上りを見ている光景の絵が出ていたが、イクダマ神社の展望台の上で落日を眺めながら私はいつもその絵を思い出していた。

折しもときは冬。さえぎる物とてない大阪原野には風は好きなだけ吹き、もうそこにはかつての「煙の都」の煤煙もスモッグもまして車の排気ガスも、それら一切の暖房効果をもつ大気汚染はなかったから、原野の空気は遠慮会釈なくただ冷えた。大阪原野の落日が満州の原野の落日を思い起こさせたのにも、落日後の情け容赦のない寒さ、冷え込みが一役買っていたが、もうひとつ言っておきたいのは、いっときの夕空の燃え上りのあと、ろくに灯火もついていない原野のことだ、たちまち一面に暗くなってすぐ夜が来たことだ。夜はまわり道しないで原野にまっすぐにやって来た。深い、どうしようもなく深い夜だ。

二

私がマルコ・ポーロ——その名であのころひそかに私が呼んでいた私より一歳年上の少年にはじめて出会ったのも、イクダマ神社の展望台で原野の落日を見たあとのことだ。落日を見たあと、私は暗くなりかけた近くの道路で木煉瓦拾いをやっていた、いや、あれは木煉瓦拾いというようななまやさしいものではなかった。まさしく木煉瓦の盗掘だった。

今はもうそんな道路はどこにもなくなったが、あのころの大阪には木煉瓦を敷きつめた道路がよくあった。空襲で火が入って半焦げになった木煉瓦は火がつきやすい上に全体にコールタールが滲み込んでいるのでけっこうな燃料になる。フロ屋で抜け目のないのが道路から掘り出して来たのをバケツ一杯いくらで買い出していた。私もときどきバケツを下げて原野のあちこちの道路を盗掘してまわった。

もちろん、ときどきお巡りにつかまった。相手と状況に応じて、「わしのお父ちゃんは空襲で死んでしもうたんや。お母ちゃんは病気で寝たきりや」と泣いてみせることもあれば、「お巡りはん、今夜のメシ代貸してエな。このバケツの木煉瓦で稼ごうと思うていたんやないか」と恩に着せたかたちで憐れっぽく、また居丈高にせがんでもみせた。この出まかせのセリフを緩急自在にあやつってみせる技術はあきらかにマルコ・ポーロに出会ったあとで彼からせしめたものであったが、私が彼にはじめて会ったのも、そのイクダマ神社近くの道路で盗掘をやってのけている最中のことだ。私がいつものように私の特製の竹べらで半焦げの木煉瓦を懸命に掘り起こしていると、私のまえに不意に知らぬ少年が立ちはだかった。

その少年がマルコ・ポーロだったのだが、まえに立ちはだかったと言っても私はうつむいて作業をしている最中だったから、私は彼の全身を認めたのでない。私が見たのは、まず彼の手垢で黒光りのしたカーキ色の半ズボンと、そこからニョッキリと突き出た二本の長い脚だった。

その脚は長く、たくましかった。原野の烈しい太陽光線にこんがり日焼けして狐色であった。まばらに毛が生えていた。かたちがよかった。細いというのでは決してないが、なにしろむやみと長いものだから、全体としては細長い印象を残した。それでいてたくましい。一言にして言えば、スマートであった。いくさが終ってまだ四月かそこらの大阪の焼跡ではそうしたスマートさは稀れであり、ドキリとさせるぐらい目についた。思春期の少女で感受性の鋭いのなら、そのときにわかにひざまずいて、その二本の脚に頬を押し当てたかも知れない。そんな図柄の絵をどこかで見たことがあるような気がそのとき私にはしたのだが、それは彼の脚のスマートさが私にそう思わせただけのことであった

かも知れない。実際、彼の両脚は寒風が吹きすさぶ原野でべつにさぶいぼもつくらず、それほどの魅力と威厳に満ちて、すっくと立っていた。

しかし、私がたとえその少女であったとしても、彼の両脚に接吻しているいとまはなかった。

「おまはん、どっから来た。」

彼はやにわに叫び、私は頭を上げざるを得なかった。

立ち上ってみると、少年は私よりはるかに長身だった。また、確実に一、二歳は年長に見えた。一見して、そのころの大阪に多かった浮浪児、あるいは、それに類した人生を送っているにちがいない少年に見えた。眼は鋭い。私はそれまでもそれからも、あんなに眼つきのわるい人間に出会ったことはない。

私は言った。

「どっから来たって、おれの勝手やないか。そこ、どいてくれ。商売の邪魔や。」

少年は私の両腕をつかんだ。

「やる気かね。やる気やったら、やってもええが……」

彼はその鋭い眼で私をにらみつけた。私も負けていなかった。私もせいいっぱいきつい眼でにらみ返した。うんざりするほど長い時間が経ったが、そのあいだ彼はまばたきひとつしないでいた。私も無理して眼をみはっていた。

「しかし……」

少年は大人びた口をきいた。

「殴りあっても、わいはつまらんと思うな。なんせ、今は日本も文化国家や、暴力はいかん。」

少年はまるでついこのあいだまで私たち生徒に何かと言っては「たるんどる。そんなことで戦争に勝てるか」とせいだいビンタをくれていたくせに、今は口を開けば「文化国家」やら「民主主義」やらのお説教をたれる私の学校の教師のような口をきいたが、それでいて彼の私をつかむ手の力は一向にゆるもうとしない。それどころか、かえっていっそう彼は手に力を入れた。

「それにな、わいはおまはんに話があるんや。取引やな。……それ、いったい、おまはん、いくらでフロ屋に売りつけるつもりや。」

「何をや。」

私は白ばくれた。

「これや。……判らんか、これやがな。」

少年はその細長いスマートな脚で、私の足もとのぶかっこうなバケツをスマートに蹴った。

「木煉瓦の話か。……」

私がようやく言うと、少年は横柄にうなずいた。私はその横柄さに腹を立てた。

「なんぼでもええやないか。おまえの知ったことか。」

少年はニヤリとした。

「まあまあ、そう怒りなさんな。怒ると、ナンバ粉のゲップとオナラが出る。わいは取引をやりたいんやさかい、怒ることはないやろ。なにもタダでこれふんだくるなんて言うてやせん。ギブ・エンド・テイクで行くんや。見てみイ、わいのポケット。……」

彼は用心ぶかく私の両腕をより強くしめ上げながら、よれよれの学生服のポケットをのぞかせた。お札が束になって入っていた。突然のお札の束の出現は私をおどろかせ、たじろがせた。

「取引ちゅうのはな。……」

少年は勝ち誇ったようにつづけた。

「おまはんが掘っただけの木煉瓦を今すぐわいがキャッシュで買うちゅうことや。どうや、おまはんにはもって帰るだけの手間が省けて、ここですぐ金が入る。それに少しぐらい色をつけてやったってもええ。」

「……」

「どうや、ええチャンスやないか。……なんぼで売る。」

私は金額を口に出した。とたんに少年は笑い出した。

「ええ度胸や。わいはおまはんが売りよる値段知っているんやで。今日（きょうび）、どこへ行ったって値段は同じ。その三倍とは大きく出よったな。」

「いやなら買わんでもええ。」

（売るもんか。）私は心のなかで言った。

「おれは一銭もひかん。」

「わいがゲンコでおまえを張り倒してもか。」

私はうなずいた。

「商売は商売や。ひかん言うたらひかん。」

とたんに少年は私に躍りかかって来た。私も彼に武者ぶりついたが、しょせん私は彼の敵ではなかった。それでもかなり効果的な一撃を彼の下アゴに加えることができたが、一分も経たないあいだに赤茶けた瓦礫の上にあおむけに倒れた私の上に彼は馬乗りになって、喉を強くしめあげた。

「どうや、ひくか。」

私はかぶりをふった。彼は腕に力を入れた。

「ひくか。」

私はまた大きくかぶりをふった。眼のなかに赤い火、青い火、ミドリの火が見え、それがチカチカしながら遠ざかって行った。ひかん、ひかん、ひかん……私はどなっているようでもあり、その声はいつまでもただ私の口のなかにとどまっているようでもあった。

……気がついてみると、少年の心配げな顔が私の眼のすぐ上にあった。

「気がついたか。」

私は照れかくしにニヤリとしようとしたが、それをそのままアカンベエにかえた。（こんなやつに笑顔なんか見せてたまるもんか。）

「大丈夫かいな。」

私は立ち上った。まだふらふらしていたが、私はわざと四股を踏んでみせた。

「大丈夫や。おれは強いんや。」

「そうや。おまはんは強いよ。」

少年はそう静かに応じたが、そのときの彼の顔は兄の顔だった。私の実の兄の顔よりもそう見えた。

私が少年に親近感をもったのはその一瞬からだった。私はその自分の気持を次のことばに言いあらわした。

「おまえ、まだ買う気があるか。おれは一銭も負けへんが。……」

「買うたるよ。おまはんの言い値でな。」

彼は歯を出して笑った。白い清潔な歯を出して笑ったと言いたいところだが、何日、何十日とみがいていない歯だ、歯クソがあちこちついているのが笑うとよく見える。

「わいはな、おまはんがさっきから気に入っていたんや。なんで気に入ったか。教えてやろか。」

「教えてくれても、一銭も負けへんで。」

私はまた悪態をついた。少年はまた笑い、おおようにうなずいてみせた。

「それはな、おまはんがガブリッと三倍の言い値をつけよったやろ。ふつうなら、まずええとこ二倍の言い値やろ。それを三倍に言いよるんやから、おまはんの心臓には毛が生えとるんやろ。ええ度胸しとる。」

「……」

「わいはな、人をだまくらかすやつが好きやねん。それもボイーンとだまくらかすやつやな。そこへもって来て、おまはん、なかなかの強情や。あれだけわいに首しめあげられても、ひかん、ひかん言いよる。見上げたもんや。」

「なんせ、こちとらは鬼畜米英とたたこうて来ましたんやさかいな。」

「フフフ……」

少年は奇妙な笑いを笑ってから言った。
「来いよ。」
彼は歩き始めた。
「どこへ行くねん。」
「ゴチャゴチャぬかすな。黙ってついて来るんや。」
ふりむきもしないで彼は言った。うむを言わせぬところが、口調にあった。少年は長いスマートな脚を交互に活発に動かしてスタスタと歩き、そのあと重い木煉瓦入りのバケツを右手に重たげにさげた私がトボトボとつづいた。
くらがりがもう瓦礫とペンペン草の原野の上にいちめんにひろがっていた。原野は夜が明けるのも早いが、日が暮れるのも早い。あのころ、私たちはたいへん健康なくらしをしていたことになる。ことに原野のまっただなかで、防空壕を改造しただけの壕舎にでも住んでいれば、あれはいやでも大地とくらしをともにしていたのだ。大地が明ければ人びとも目をさまし、大地が暮れれば、人びとも眠りにつく。原野には電気がまだ来ていなかったところが多かったし、電気があったところで、しょっちゅう停電していた。
ところどころ、ぼんやり灯がついていた。壕舎、焼け残りの土蔵。ところどころ、夕餉のケムリがあがっていた。しまい忘れた洗濯物がぶざまに突っ立つ錆びたガスの鉄管と鉄管とのあいだに張ったヒモにぶら下がっていた。つぎはぎだらけのカーキ色の軍服のズボン。何かの袋をほぐしてつくったらしいぶかっこうなパンツ、ズロース。いまや威力を失なった日本国旗のようにぼんやり垂れ下るフ

ンドシ。私はしきりに石を蹴った。少年は無言でふりむきもしなかった。

お寺のかたまる一角に来た。いや、お寺の廃墟の並ぶ一角だ。墓石が瓦礫のあいだに呆然と立っていたり、わしはもうアカン、どうにでもしてくれ、と言わんばかりにだらしなく寝ころがっている。崩れ落ちた門があり、ペンペン草が土砂の堆積の上にわがもの顔に密集して繁茂している。

「ここや。」

寺の廃墟のひとつに入って行きながら、少年はあいかわらず私に背を向けたままそれだけ短く言った。私は口笛を吹いた。さらば、ラバウルよ。また来る日まで……

「うるさいな。わいは戦争の歌はもうごめんやで。」

私が口笛を吹くのを止めると、彼は立ちどまった。

「どうや、この家、ちょっとしたもんやろ。」

家？　――私は墓石の堆積と見たのである。墓石がてんでにあっちゃこっちゃの方角に乱雑に堆積しているなかにうまいこと空間がひらけていて、そこに半焦げのトタン板がかぶせてあった。

「おまえ、ここに住んでんのか。」

彼はふり返り、それからゆっくり大仰に深呼吸でもするようにうなずいた。

「どうや、石造建築というところやろ。」

「昔からここに住んでんのか。」

「アホ言え。……一月まえからや。」

「一月まえはどこにいたんや。」

少年は答えなかった。

「ここ、おまえの家があったとこか。」

「アホ、わいとこは坊主なんかとちがう。」

そう言うなり、少年は私のバケツをひったくった。

「あいかわらずゴチャゴチャ言うやつやな。うるそうてかなわんわ。とにかくこれはもろた。」

彼は克明に木煉瓦の個数をかぞえ、私の言い値通りの金額をお札、銅貨とりまぜて私の掌のなかにおいた。

「ありがとう。」

私は言った。できるだけ気どった声、できるだけ気どった態度で、ええとこの坊っちゃんはそんなふうに上品に言ってのけるにちがいないと心のなかでやに下がりながら、それだけ口に出したのだが、少年はもう聞いていなかった。

「どうや、おまはん、ひとつ、うちのフロに入って行くか。」

「フロ？」

「おまはんなんか、フロ屋のフロしか入ったことないんやろ。そこへ行くと、わいなんか……おまはんの木煉瓦使うてわかしたろと思うてたんや。」

彼はアゴをしゃくって「石造建築」の横手を指した。焼跡のどこかからがめって来たにちがいない大きな五右衛門ブロのフロ釜が墓石二つを横たえた上に鎮座していた。雨水か何か知らないが、水はたしかに入っている。水の面に大きな枯葉といっしょに何やらゴミゴミしたものがいちめんに浮かん

でいたが、それは湯垢であり、またたしかにそこに入った人間が長期間にわたって流し出した垢であるにちがいない。暗いのによくそんなものが見えたものだと言い出すうるさい人がいたら困るので念のために言っておこう、気がついてみると、いつのまにか空にはポッカリ月が出ていた。満月に近いまんまるの月である。私と少年は明るい月光のなかで今はっきりとむかいあっているのだが、それはなんということもなく気はずかしいことであった。

その気はずかしさがおたがいに通じ合ったせいか、私と少年はそれからしばらく無言で木煉瓦を燃やすことに没頭した。木煉瓦はよく燃えて、気持がよかった。「やっぱし三倍高う吹っかけるだけあるな。勢いよう燃えよるわ。」「四倍吹っかけてもよかったな。」「アホぬかせ。……しかし、おまはんも商売うまいやっちゃな。おまはんのおやっさんも商売人か。」「ちがう。」私はかぶりをふったが、彼はそのあと「それやったら、何んや」と一瞬私が予期した質問を口に出して来なかった。私は逆に「おまえのおやっさんは何んや」と訊ねかかっていたが、彼は答えなかった。そのまますぐ無言で服を脱ぎ始めた。「おまえも脱げ。」彼は命令するように言った。

「寒いやろ。」

「そうでもないな。」

またたくまに裸かになった彼はエイヤッと気合いを入れながら宙空にゲンコをふり上げた。（こいつ、マルコ・ポーロみたいなやつやな）と私は不意に思った。私が何故そんな奇妙なことを考えついたのかいまだによく判らないのだが、たぶん、私はそのころはじめてマルコ・ポーロという名前と彼の業績とを聞き知ったのだ。ピッタリという気がした。私のイメージによれば、マルコ・ポーロはあ

れほどの大旅行者だったのだから、まず長くたくましい脚と鋭い眼を持っていなくてはならないのだが、この少年ほどその条件にふさわしい者はなかった。マルコ・ポーロは原野やら砂漠やらをその長くたくましい二本の脚を交互に大きく動かして西から東へ移動する。そのとき彼の鋭い眼ははるかはてのジパング国めがけてまばたいていたのにちがいないのだが、同じようにわが日本は大阪の焼跡のマルコ・ポーロ少年の眼も未知なる未来にむかってまばたき、それとともにこのはてしない瓦礫の原野を彼の二本の長くたくましい脚は大きく動いて行くのではないか。わがマルコ・ポーロよ——と、私は呼びかけていた。しかし、おまえはいったいどこへ行くのだ。どこへ私を連れて行こうとしているのだ。

けれども、現実のマルコ・ポーロ少年は、私の想像力の飛翔をそれ以上には許さなかった。彼は裸体になってフロ釜のなかに並んだ私にむかって、やにわに言った。

「なんや、おまはんのチンポコ、まだえらい小さいやないか。わいのを見てみイ。」

彼は立ち上り、彼のそれをフロ釜のなかにかがんだ私の眼のまえで大きくふってみせた。

「おまはんはまだてんごしたことないやろ。ひとつ、わいが教えてやるわ。」

彼は自分の物体を掌で摩擦した。みるみる、それはふくれあがった。私はふしぎな見世物でも見るような眼でそれを見ていたが、同時に私の体内を斜めに、これまで感じたことがないような感覚が走り抜けて行くのを感じとっていた。私は眼を閉じた。くろいドロドロしたものが、そのころ私が食べていたダンゴ汁のような、ヤシ粉の汁のような、闇市の進駐軍の残飯シチューのようなそんなわけの判らないくさってよどんだものが、まぶたの裏側、皮膚の裏側、臓器の裏側、心の裏側、その他あり

とあらゆるものの裏側をぐるぐる渦巻き流れた。

「どこへ行っていたんや。」

妙に静かな声がした。私はおどろいて眼を開いた。

「どこへ行っていたんや。」

マルコ・ポーロはさっきのてんごうんぬんを口にしたときとはまったく別人としか思えないような静かで、また妙にやさしい口調でくり返したが、そのことばが私にむけられたものでないことはたしかだった。私はあわててふり返った。

少女が立っていた。いや、もっと正確に言うと、たぶん少女らしい、同じボロ屑の塊りだとしてもどこかその外部の輪郭にやさしさを感じさせるものが立っていた。「石造建築」の横手、月光がちょうどその影によって斜めに断ち切られたところに、煤けた真黒な顔に眼だけが光っていた。私は後年ターザンの映画か何かで、ジャングルに育った少女の黒ヒョウのごとき眼の輝きを見たことがあるが、そのときの少女の眼はまさにそうだった。そんなふうに私の視界の中心で、それはキラキラとくるめいた。

「あれ、誰や。」

「妹や。」

マルコ・ポーロはそう答えたが、たぶん「石造建築」のなかへ潜り込んでしまったのだろう、そうとしか思えないのだが、私と彼との短い一問一答のやりとりのあいだに、彼女の姿はかき消すように消えていた。

「おまはん、もう帰れよ。」

服を着終ると、マルコ・ポーロは奇妙に不機嫌に言った。私は空になったバケツを下げて、彼に無言で別れを告げた。

歩き始めてから、ふしぎに心残りがあった。それがマルコ・ポーロにむけられたものなのか、それとも彼の妹にむけられたものか、よく判らなかったが、どちらにせよ、ふり返らないで歩いて行く私の姿勢には、どこかしら無理があった。

しばらく行ったところで、私は暗黒にむかって立小便をした。私はそうしながら子細にチンポコを点検したが、それはたしかにまだ小さかった。

三

（あいつ、クレオパトラみたいなやつやな）とは、私が空のバケツを下げての帰りの道で突然思いついたことであった。べつに深いわけはなかった。マルコ・ポーロが最近聞き知った名前であったなら、クレオパトラも同じだった。なにしろクレオパトラは鼻が一センチ低かったら（だったか）、世界の歴史が変っていただろうとセンサクされるほどの美女である。マルコ・ポーロの妹に会ったあとですぐ私にその名がひらめいたとすれば、彼女にそれだけの魅力があったからにちがいない。ただ、ここで言っておきたいのは、当然私がクレオパトラにまた会いたくなったとしても、それはマルコ・ポーロと会いたい気持と密接につながっていたことだ。しかし、これは逆にも言えた。数日後、マルコ・ポーロに会いたくなってお寺の廃墟の「石造建築」に足をむけたとき、私の眼に浮かび上って見えて来た

のは、長いスマートな脚を持ったマルコ・ポーロの姿だけではなかった。彼の横に外部の輪郭にやさしさを感じさせるものがあったボロ屑の塊りもはっきりと見えて来ていた。

私が彼らに会いに出かけたのは、一日中木煉瓦拾いに精を出してなじみのフロ屋に盗掘品を納入してからのことだったから、また夕暮になっていた。あかあかと原野のはてで落日が燃え上っていることは焼け残りの土蔵や壕舎のお粗末なトタン屋根への落日の照り返しで見ないでも判ったが、私の顔は照り返しだけであかくなったのではなかった。いざ、お寺の廃墟に入ったところで「石造建築」のなかからクレオパトラが突然出て来たのである。あれは文字通り躍り出て来たという感じの出現だった。と私は今でも思い出すのだが、とたんに私の全身はふしぎに熱くなり、顔は火照った。

クレオパトラも私の出現におどろいたように立ちどまったが、正直に言っておきたい、彼女のほうはただ立ちどまっただけで、よしんば彼女の顔があかく火照って見えたとしても、それはただの落日の照り返しにすぎなかった。

「兄ちゃん、いるか。」

私はぶっきらぼうに言った。もっとやさしい言い方をしたかったのだが、口から出て来たのはそのぶっきらぼうなセリフだった。

「いよらん。」

クレオパトラも私に輪をかけたような無愛想な口調のひと言で応じた。

「どこに行きよったんや。」

「知らん。」

「いつ帰って来よる。」
「知らん。」
木でハナをくくったようなというのは、まさにそのときのクレオパトラの受け答えであったにちがいない。しかし、私はふしぎに腹が立たなかった。逆に何か心が弾んで来ていた。私は問答をつづけた。
「おまえ、学校へ行ってへんのか。」
「行ってへん。」
「兄ちゃんも、学校へ行ってへんのか。」
「行ってへん。」
「おまえら二人でここに住んでるのか。」
「そうや。」
「他に家はあらへんのか。」
「あらへん。」
「お父さん、お母さんはいよらんのか。」
「いよらん。」
「どこへ行きよったんや。」
「知らん。」
「死んだんか。」
「知らん。」

クレオパトラはそうアッサリ言ってのけてから、
「あんた、何んでそんなに他人のことばっかりきくのん。」
とふしぎそうに訊ねた。私のあれこれのセンサクに怒っているというのではなかった。ほんとうにふしぎがっている。その感じがあった。私はかえって不意を衝かれたようにたじろいだ。
「うちは他人のことなんかに興味ない。」
クレオパトラはそうこれも興味なげに言ってから、まっすぐに私を見た。煤けた真黒な顔にこのあいだのように眼だけがキラキラ輝いて見えた。
「おまえは何んに興味があるねん。」
私もその眼を負けずに見返しながら言った。クレオパトラの口からすぐ答が出たが、それはまったく私が予想していなかった答だった。
「わたし。」
彼女はまたまっすぐに私を見た。何を言いやがる、という気持に私はなったが、そう言われてみれば、他に言うことはない。そんな気持にもなった。
「おまえの兄ちゃん、おそいな。」
私はあたりを見まわした。もうだいぶ暗くなって来ていた。こいつら、晩飯はどうするんやろ。私はクレオパトラに訊ねずに心のなかで自分に訊ねた。
「おまえの兄ちゃん、今ごろまで何しとるねん。」
ことばの半ばで、私はクレオパトラの「知らん」を予期したが、彼女はまったくちがう答を口に出した。

「仕事。」
「仕事？」
私はオーム返しに言ってから、
「何んの仕事や。」
とこれも「知らん」を途中で予想しながら当然の質問を口にした。クレオパトラはまた思いがけない答をいかにも生意気にまくれ上ったように見える薄い唇のあいだから何気ない口調で言ってのけた。
「泥棒。」
「泥棒？」
私はまたオーム返しに言った。クレオパトラは軽くうなずいてから、またキラキラ光る眼でまっすぐに私を見た。その視線のまっすぐさで彼女がべつに私をオチョクッテいるのではないことは判った。泥棒が仕事か、ときけば、そうだ、と彼女はすぐ答えるにちがいなかった。そして、それはまさにそうなのだ。仕事が泥棒であってわるいわけはない。彼女はまったくまっとうなことをしゃべっている。私は何か途方もなく愉快な気持になった。
「何んの泥棒や。」
私は思わず吹き出したくなる気持をこらえて訊ねた。
「よう知らんけど、いろいろやってはるんとちがう。」
クレオパトラは他人ごとのように言った。いや、考えてみると、それはまさしく他人ごとであった。私は面白がって泥棒の種類を列挙してみせた。私は調子にのっていた。

「かっぱらい、置き引き、強盗、……そやな、それからただの泥棒。」
「強盗はしはらんみたい。」
クレオパトラはまた他人(ひと)ごとを口に出した。
「何んでしはらんのや。」
「人を殺すのはいやや、そう言うてはった。」
クレオパトラは口をはさみかけた私をおさえ込むように少し声の調子をたかめてつづけた。
「おれは強い。勇気もある。そやからやる気になったら殺す。それがこわいから……」
と言いかけて、
「いいや、それがいややから……」
と大仰に言いなおした。
「強盗はやらへん。そう言うてはった。」
「おまえは泥棒せエへんのか。」
私は話題をかえるように言った。クレオパトラはまたすぐ答えた。
「する。」
それがまっとうな答であるかのように彼女はまたまっすぐに私を見た。
「おまえは何んの泥棒やるねん。」
私は面白がってつづけた。
「かっぱらい。置き引き。ただの泥棒。……」

とさっきのように泥棒仕事のリスト・アップをやってのけてから、
「強盗はおまえもやらへんのか。」
とことのついでのようにして訊ねた。
「やる。」
クレオパトラはまた意外な答を口に出した。そして、それがまっとうな答であることをうけあうようにキラキラ光る眼でまっすぐに私を見た。
「やる言うて、今までやったことあるんか。」
「ある。」
クレオパトラはあいかわらず私をみつめながら言った。
「相手は子供か。」
「おっさん。」
このクレオパトラの答には私は思わず吹き出してしまったが、クレオパトラはかわらずまっすぐに私をキラキラ光る眼で見つづけている。私は仕方なしに質問をつづけた。
「どんなおっさんや。」
「ふつうのおっさん。」
おちょくっているのか、真面目に言っているのか、クレオパトラはそんな言い方をした。
「そのふつうのおっさんおどかすのに、何使うたんや。」
「ナイフ。」

クレオパトラは平然と言い返してから、ちょっと間(ま)をおいてつけ加えた。
「うち、ナイフ使うのうまい。」
「ほんまか。」
「ほんま。」
なんならやってみせようか、という顔をクレオパトラはたしかに一瞬して見せた。たけだけしいものが顔に出て、私がこわくなったのは事実だ。
「ナイフでふつうのおっさんおどしてなんぼとった。」
「そら秘密、商売の秘密。」
クレオパトラはニコリともしないで言った。
「おまえら、その泥棒商売で食っているのか。おまえもおまえの兄ちゃんも……」
「ちがう。」
クレオパトラは大きくかぶりをふった。
「今日は泥棒の仕事の日や。それで、あの人、泥棒しに行きはった。あの人、そうスケジュールを決めてはる。」
私をおどろかせたのは、あの人の決めてはるスケジュールのことだけではなかった。もうひとつ、クレオパトラが自分の兄のことを「あの人」という突き放した言い方で言ったことも、私をおどろかせた。いや、そっちのほうに私はもっとおどろいていた。
「あの人、時間も決めてはる。泥棒の日の泥棒しはる時間は午後二時から晩の十時まで。それで切り

上げる。あんまりおそいとかえってあやしまれてアシがつく。そう言うていはる。」
「他の日は何んのスケジュールや。」
「明日は商売しはる日。泥棒して来はった物なんか売りに行きはる。」
「明後日は何んや。」
「休み。」
クレオパトラは打てばひびくようにすぐそう答えてからいたずらっぽく笑った。考えてみると、そのときが私が彼女の微笑を見た最初のときだったのだ。
「おまえはスケジュールつくらへんのか。」
私はまた話題をかえた。
「つくらん。」
クレオパトラはまたアッサリ応じた。
「何んでや。」
「きらいやから。」
クレオパトラはそう言ってから、
「あの人はどうせ晩の十時過ぎんと帰って来よらへん。もう帰ってんか。」
とつづけた。この無遠慮な言い方に私はさすがにムッとしたが、彼女にしてみれば、当然のことを当然の言い方で言ったにすぎなかったにちがいない。眼はまだまっすぐに私を見ていた。
「これから何するねん、飯でもつくるんか。」

私も無遠慮に訊ね返した。
「ちがう。」
彼女は大きくかぶりをふった。自分で切ったにしてはかなりうまく切りそろえられた(私はマルコ・ポーロが切ってやったのではないかととっさに思った。いや、信じた)短いオカッパの髪の毛がその拍子にゆさゆさ揺れた。私は一瞬巧みな手品でも見るようにそれに見とれた。
「うちは仕事に行く。」
「そうスケジュールで決まっとるんか。」
私は茶化すように言った。
「うちはスケジュールはきらいや。さっきそう言うた。」
クレオパトラは怒った声を出した。
「うちは今仕事する気になったんや。」
「仕事は何んや。泥棒か。」
「そう。」
クレオパトラは軽くうなずいた。
「かっぱらいか。強盗か。」
私は調子にのってつづけた。
「決めてへん。」
クレオパトラはまた大きくかぶりをふった。今度は、しかし、オカッパの髪の毛は私が一瞬期待し

たようにゆさゆさ揺れなかった。
「うちはスケジュールはきらいや。」
「そやけど……」
私も負けずに言い返した。
「おまえらは何んでそんなに一所懸命になって仕事するんや。」
泥棒までして、と言いかけたが、それはやめにした。やめてから、強盗までして、と言えばよかったな、ととっさに私は思った。
「食うためや。それから金も溜まる。」
クレオパトラは当然の答を当然の口調で言った。何んだ、そんなことか、という気がしないでもなかったが、それは何やら拍子抜けのした、気落ちのする答だったが、しかし、それはまさにそうだった。そうだったとしか言いようがない。しかし、私はつづけた。
「金溜めて、どうするねん。」
「うちはつかう。」
クレオパトラの答はまさにまた当然の答であった。
「おまえの兄ちゃんは……」
「ごっつい事業しはる。あの人、そう言うていはる。」
「どんなごっつい事業や。」
「知らん。」

クレオパトラはさっきからの話に一切ケリをつけるようにして私の質問にそうひと言で応じてから、私を放り出すようにしてすでにとっぷりと暮れて来た原野の闇のなかめがけて歩き出した。いや、それでも一度は私をふりむいて、

「あの人にきいてみイな。」

とせいいっぱいの好意を私に示すように言った。

「おまえの言う通りするでエ。」

私もそのせいいっぱいの好意に感謝するようにすでにクレオパトラの小さなからだがのみ込まれてしまった、そんなふうにして一瞬のうちに消えてしまった原野の漆黒の闇にむかってひと声、「おまえ」に力を入れながら大声で吠え立てた。

四

クレオパトラには会ったが、マルコ・ポーロにはいつ会えるかと、そのぬばたまの深い闇のなかの帰り道で私は少しばかり思案したが、三日も経たないあいだに彼が先方から私の家にやって来た。どこでどう私の住所を探し出したのか、あとで話を聞いて解(げ)せたが、とにかくマルコ・ポーロのわが家という原野の数少ない焼け残りの人家への突然の出現は私をおどろかせた。

わが家が焼け残りの人家であったと言っても、べつに無傷であったわけではない。小型の焼夷弾が一発天井を貫いて落ちて来たが、これはそのとき家にいた私と母親の二人で消した。落ちて来て一瞬巨大な焔をあげて燃え上ったのにフトンをかけ、ボーフラのいっぱいにつまった防火水槽の水を二人

で交互にバケツで運んで来てフトンの上からぶっかけたら、奇蹟のように消えてしまった。母親はそのあと腰が抜けてそのままそこにへたり込んでしまったが、隣組の防火訓練でやらされていた通りのことをやったら、小型とはいえ焼夷弾一発みごとに消しとげられたのである。あとにも先にも、お上に言われたことをやっていい目を見たのはそのときだけであった。もっとも天井にはポッカリ大きな穴が開いて、そこからしばらく月が見えていた。大きな穴にふさわしい大きな満月であった。

さて、マルコ・ポーロの突然のわが家への訪問だが、おどろいたことに彼はひとりで来たのではなかった。お客を連れて来た。と言うより、お客が運転する車に乗って来たのである。それだけでも車などろくに走っていなかったあのころでは驚嘆に値することであったが、さらにおどろくなかれ、お客は決して小さなサイズではないはずのマルコ・ポーロの二倍の背丈とボリュームをもつ若いアメリカ兵であり、車は彼の運転するジープであった。マルコ・ポーロはジープの後部席に何箱か積み上げた段ボールの箱のあいだに身をひそめるようにして乗って来ていたのだが、そのさまは偶然窓から外を見ていた私自身が見つけたものだ。慌てて外へ出ると、もうジープはわが家のまえにとまっていて、二人は何やらしゃべり合いながら――と言っても、要するに一方がＯＫというのを他方がまたＯＫというふうに受けるというたぐいのやりとりであることはすぐ判ったが、その何箱かの段ボール箱をおろしにかかっている。そのとき血相かえて外にとび出た私が「これ、何んや」と大声でわめきたてかけながら途中で低声にかわったのは、何かしらヤバイけはいがそこにあると直感できたからである。こういうところはマルコ・ポーロという少年、さすがいろんなシュラ場を経てきた人物らしく機を見るに敏で、「な、これ、秘密の大事な物や、ちょっとあずかっといて欲しいねん」と私の耳に口を押

しつけて来て、いかにも秘密めかして低声でそれだけのことばを私の耳の穴深くに押し込んだ。

有無を言わせぬというのはまさにそういうときのさまを言うにちがいない。判断力を一瞬失なった私に玄関を開けさせると、段ボール箱をそのまま二人で運び入れた。口惜しいが、そこには、やはり、二人のうちのひとりがアメリカ兵であったことが大いに私の判断力の停止に力を及ぼしていたにちがいない。とにかく相手の一方は毛色もことばもちがった外人、しかもアメリカ兵なのである。べつにこわくはなかったが、どう対していいものかマゴマゴしているうちに段ボールの箱は玄関のたたきの上に積み上げられてしまっていた。

アメリカ兵は少年のように赤い頬をした若い兵隊で、背丈もボリュームも大きかったが、何より私をおどろかせたのは、お尻の肉づきがかくだんによかったことであった。ズボンのお尻がはちきれそうになっていた。牛肉をビフテキやらシチューやらで毎日たらふく食っていれば、あんなお尻になるのだな、というのが彼のズボンのお尻を見ての私の第一の感想であった。

「ま、これ、しばらくあずかっといてくれ。お礼は出す。」

たたきに段ボール箱を積み上げ、ガラス戸をやけに丁寧な動作で閉じたあと、マルコ・ポーロはまた低声で言った。耳にまた口を押しつけて来てもいたが、もうその必要はないこと、つまり、それは彼が芝居がかりにこけおどしをやっているだけのことだとはすぐ判断できた。

「中身は何んや。」

一瞬ピストルかピストルの弾でも入っているのかと思ったが、そんなものがこんな段ボール箱に入っているわけはないだろう。それぐらいのことはこんなシュラ場の体験のない私にもすぐ判断がつ

いた。

「いったい、物は何んや。」

私はちょっと凄んでみせた。その気で言った。昔見た映画に、親分がべつの親分が送ってよこした木箱の中身のことを子分に訊ねる場面があった。たしか親分はそんな口のきき方をした。

マルコ・ポーロはニヤリとした。そして、右手で一番上の段ボールをタイコのように調子をつけて叩いた。

「靴下や。と言うたかて、おまはんやわいのような男が穿く靴下やない。女が穿くナイロンの薄い薄い靴下や。進駐軍には女子の兵隊もいるやろ。そいつらが穿きよるんやけど、穿くと、どんな大根脚でも脚がきれいに透き通って見えてええかたちになる。まさに進駐軍の魔法の靴下や。パンパンが欲しがる。パンパンだけやない。ふつうの女も欲しがる。タダでやる言うたら、今日、よろこんで誰でもパンパンになりよるで。」

薄い透き通った靴下をつけた一団が勢ぞろいしている図柄があざやかに眼に現われて来たのを大きく払いのけるように私は「その下のは何んや」と大声を出した。下の三つの段ボール箱はあきらかに一番上のとはかたちがそれぞれちがっていた。

「この二つはタバコ。ラッキー・ストライクにキャメル。あとは何やったか。」

「ボール・モール。」

マルコ・ポーロの言うことが判ったはずはないと思うのだが、しょざいなげに私とマルコ・ポーロとのやりとりを聞いていたアメリカ兵が突然口をきいた。

「ジョン、そうや、ポール・モールや。」
マルコ・ポーロはいばった口のきき方をした。それは私をおどろかせた。
「これは……」
マルコ・ポーロはつづけていっとう下の段ボール箱を足で蹴った。
「ウイスキーや。スコッチとかバーボンとか、ウイスキーにもいろんなのがある。」
私に判らぬことを口にしてから、マルコ・ポーロは私の顔を見すえるようにきつい眼で見た。
「わいはこの箱のひとつずつから、おまはんにお礼をやろうと思うんや。ここの物、しばらくあずかってもらうお礼にな。今ここで箱を開いてお礼を出してもええけど、わいらは時間がない。あとでゆっくりおまはんが開いて、自分で取ったらよろしい。おまはんが取る物の数はどうするか。そやな。……」
マルコ・ポーロは勝手に調子よげにつづけた。
「ナイロンの靴下は二足。タバコはラッキー・ストライク、キャメルの各一箱。一箱言うても、大きな箱のひと箱やで。つまり、アメリカではこういうのをカートンと言うねん。カートン二つや、ツー・カートン。」
マルコ・ポーロはおしまいの英語をなかなかみごとな発音で言ってみせた。すくなくとも私の耳にはそうひびいたが、お尻の大きなアメリカ兵が、ウン、ウンとうなずいてみせたのを見ると、私の推測はあたっていたにちがいない。
「それからな、ウイスキーは一本。スコッチでもバーボンでもおまはんの好きなのを選べ。」

と言っても、彼のことばは私にとって理解不可能なことがらであった。

「ケチしたらあかんで。」

私はマルコ・ポーロが手前勝手な大演説を上機嫌に終えたところで、彼がしゃべったことのすべてに水をぶっかけるように言った。

「ケチしたら、おれはおまえらのことをケイサツに言うてやるで。」

いや、これではまだ言い足りない。ことばにひと区切りおいて、

「進駐軍のエムピーにも言うてやるで。」

とさらにもうひとつ大きくすごんでみせた。

マルコ・ポーロは笑い出した。

「判った、判った。」

口は笑ってはいたが、眼は笑っていない。いつものきつい眼で、マルコ・ポーロは私をにらみつけながら、

「それでおまはんは、いったい、いくらもらいたいねん。」

と大声を出した。

「三倍や。」

私も負けずに大声を出した。マルコ・ポーロは一瞬考え込む顔になったがすぐ言った。

「このあいだもおまはんは三倍、木煉瓦の値段吹っかけよった。同じこと言うのは芸がないで、二倍にしとき。」

そう軽くいなすように言ってから、

「そうすると、ナイロンの大根脚をとびきりかっこうよく見せる靴下が四足。タバコがラッキー・ストライク、キャメル、それぞれカートン二つ、ツー・カートン二つで、ええか、フォー・カートン。」

その英語で何思ったか、ズボンのお尻がはちきれるアメリカ兵がウン、ウンとまたうなずいた。

「それとウイスキー二本。……これで、どうや、手打ちとするか。」

私は大きくかぶりをふってからつづけた。

「タバコがひとつ足らんで。なんとかいうたやろ、あれ。おまえはさっきも言わんかったやつ。ポー……」

と言いかけてつまったところで、お尻の大きなアメリカ兵が「ポール・モール」と巨体に似合わぬ小さな声で引きとった。

「それをまず一箱。二倍にして二箱。なんでおまえがさっき言わんかったのか、おれには判っていたで。値段が他の二つより高いからや。」

私は勢いをつけて言った。マルコ・ポーロはまた笑い出した。

「おまはんもようやる。よっしゃ。それでやることにする。おまはん、箱を開いて、とったらよろし。しかし、言うとくがな、おまはん、ごまかしたらいかん。これだけは言うとく。」

きつい眼がいっそうきつくなって私をにらみつけた。私も負けずにせいいっぱいこわい顔をつくってにらみ返した。

「まあ、うたがうんやったら、はじめからこんなもんおれのところに持って来んのがええやろ。」

つづきは製品版でお読みください。